

特殊検査介助の育成についての取り組み

いづろ今村病院

内視鏡室 ○宮内 智美、宮田 美穂、有村 智子
消化器内科 時任 大吾

【はじめに】

当院では特殊検査が年間50件行われているが、所属スタッフ数が流動的であり特殊検査介助の経験が浅いスタッフが7割を占めた。緊急の特殊検査介助時に適切でない物品が準備された経験から、未経験者に対する使用物品、検査処置等のシミュレーションが急務と考えられた。

【目的】

特殊検査（イレウスチューブ挿入、ステント挿入、ERCP、PEG、止血術）におけるシミュレーション教育と進捗状況一覧表の活用により、特殊検査介助が適切に実施できる。

【方法】

期間 令和3年7月～令和4年6月

対象 内視鏡検査室の看護師・臨床工学技士8～10名（退職や異動あり）

方法 ①介助経験回数アンケート調査 ②検査シミュレーション教育の計画・実施
③進捗状況一覧表の掲示 ④教育方法に対するアンケート調査

【結果】

- ① の結果、未経験者数は10名中 イレウスチューブ挿入7名、ステント挿入4名、ERCP 7名、PEG 3名、止血術6名であった。
- ② は経験者を中心に行っていたが、令和4年4月から未経験者も担当とした。
- ③ の運用で、イレウスチューブ挿入、ステント挿入、PEG、止血術は未経験者が0名になった。ERCPは検査数が0件であった。
- ④ の結果、「進捗状況一覧表」はあった方が良い 87%、どちらとも言えない 13%、必要ない 0%、「シミュレーション教育」はあった方が良い 87%、どちらとも言えない 13%、必要ない 0%であった。進捗状況一覧表に対しては「介助回数は一目で分かりやすい」「回数の多さが強調されるため、達成度の評価可能な項目を作った方が良い」、シミュレーション教育に対しては「担当の立場と生徒の立場、両方とも勉強になった。未経験でも緊急の特殊検査介助を行う際に不安なく対応できそう」「資料作成の負担は大きいですが、有用性が高く勉強になった」と意見があった。

【考察】

当院の特殊検査は件数が少なく、バランス良く経験を重ねる事が困難なため、今回の進捗状況一覧表により未経験者が可視化され、検査介助の振り分けが可能となった。一方で、回数のみが強調され、達成度の評価が困難であったため、今後の評価方法を検討する必要がある。またシミュレーション教育により、未経験者も「指導する立場で学習を行う」状況を作ったことで、検査介助に対する知識を深め、介助への積極性が出てきたと考えられる。

【結論】

特殊検査介助未経験者を対象に進捗状況一覧表を活用したことで、全員が特殊検査を経験できたが達成度評価の形式は今後の課題である。またシミュレーション教育に参加することで技術を習得しようとする意欲へと変化した。